

指揮者への道

女性指揮者が好奇の目で見られる時代は終わったが、スベランツァ(希望)という名前の通り、スカップツチの迷いのない棒さばきは、クラシック音楽に、イタリアに、女性に希望をもたらしてくる。現在音楽監督を務めるベルギーのリエージュ・ワロン国立歌劇場の、ステイーファン・マツォーニス芸術監督が逝去した困難な状況のなか、インタヴューに時間を割いてくれた。

バチカン放送のジャーナリストだった父と、高校の英語教師だった母親の間に次女として生まれ、姉のピアノ・レッスンについていくうちにその才能を認められた彼女は、音楽のない人生の記憶はないと言う。でも最初から指揮者を目指していたわけではなかったのだ。

「世界の主要な歌劇場で、副指揮者として、そしてリッカルド・ムーティなど偉大な指揮者のアシスタントとして過ご

してきた長い年月が、自然と自分も指揮台に上がることにつながる道筋となっていたのです。ピアノから始まり、室内楽、オペラとつながっていった自分の音楽の長い道程の集大成が指揮をするということなのです」

4歳で始めたピアノをやめようと思っただこともある。

「10歳のときに故郷ローマのサンタ・チェチーリア音楽院へ入学しましたが、高校の勉強との両立が大変だったのです。高校のあとはピアノのある食堂でサ

ンドウィッチを食べながら練習して、音楽院に行き、遅くに帰宅後宿題をする毎日でした。でも、母が「神様が与えてくれた才能を生かしなさい」と激励してくれて、卒業できたのです」

修行時代

ピアノと共に室内楽も修めた卒業後、奨学金を得て19歳でニューヨークのジュリアード音楽院に留学し、伴奏法のマスターも取得した。そんななかで歌やオペラに傾倒し、1998年から2011年までジェイムズ・レヴァインと共に、ニューヨーク・シティオペラ、シカゴ・オペラ、そしてメトロポリタン歌劇場で働いた。2005年にはムーティとウィーンで出会い、アシスタントとしてローマ歌劇場やザルツブルクにも同行した。ウィーン国立歌劇場時代には小澤征爾やスーピン・メータ、ダニエレ・ガッティの練習ピアノニストも務めている。当歌劇場の専属歌手だったバリトンの甲斐栄次郎もムーティが指揮した《フィガロの結婚》でアントニオ役を歌ったとき、通奏低音でハンマークラヴィアを弾いたスカップツチと共演した。そのほか数多くの演目で、リハーサルから本番後まで、彼女からのアドヴァイスは歌唱の上で大きな支えとなったと回想する。

「そうやって歌手たちに役の準備をさせ、指揮者たちのアシスタントをしてきたことは、劇場内での経験をかばんにたくさん詰め込んだようなものです。そのかばんを持って指揮台に上がったら、

スベランツァ・スカップツチ イタリアの伝統を継承、世界の提示



ウィーン国立歌劇場デビューで話題となった彼女も、いまやオペラ指揮者を代表する一人に

Interview ⑭
with

Scappucci, Speranza

取材・文 中東生
Text Shinobu Naka

リーダーとしてオペラを作り上げること
に集中しなければならぬのです。指揮
者デビューは2012年にイェール大学
のオペラ科のドリス・クロス主任が依頼
してくれたモーツァルト《コジ・ファン
・トゥツテ》でした。でもそれからも
長い間、世界の多くの劇場でピアノスト
や副指揮として劇場で仕事をしてくま
した。ウィリアム・クリスティと行ったグ
ラインドボーン音楽祭も貴重な経験で
す。そんなバンパンのかばんを持って、
リハーサルでなにかを創造するのです」

伝統の継承

イタリア人として、イタリア・オペラ
の伝統を継承していくことを、どう考え
ているのだろうか。

「私たちの音楽を世界に広め続けてい
くのは重要ですが、それは同郷の作曲家
たちや彼らが書いたことを尊重し、それ
らを曲げないように、作曲家たちの前に
しゃしゃり出ないようにすることによっ
てのみ、私たちの文化的財産に名声を与
え、誇りを持って世界に提示し続けられ
るのです」

女性として指揮する長所・短所、女性
ならではの、のエピソードなどあるかと聞
いてみると「音楽に理はなく、性別もあ
りません。私はスペランツァ・スカッ
プッチ、指揮者。私が成すことについて
評価されるのであって、私がかれかとい
うことで判断されるわけではありません」
と深い返事が返ってきた。

スカップッチの夢

貴女の夢は何でしょう。

「再び抱き合ったり、安全に旅ができ
たり、恐れることなく生きられ、劇場を
再び聴衆で満たし、感動を共有し、常に
その美を追求していきける世界に戻るこ
とです。2020年の「東京・春・音楽
祭（ハルサイ）もコロナ禍でキャンセル
となり、とても悲しい思いが残っていま
す。プッチーニ『三部作』は3年前から準
備していたのです！でも、将来のハル
サイで取り上げるつもりです。ピアノス
トとして、また、マエストロ・リッカル
ド・ムーティの副指揮としては、ウィー
ン国立歌劇場と共に、またはハルサイの
ために何度も日本を訪れています。指揮
者としては2017年のハルサイが初め
てで、その翌年のハルサイにもロツシー
ニ《スターバト・マーテル》で再訪日し
ました。日本も、東京も、日本人も大好
き、そして4月は桜の季節でもあり、私
の誕生日でもあるので、今年は現状が悪
化しなければ、新国立劇場でのドニゼッ
ティ《ランメルモールのルチア》を指揮
しに行くのを、とても楽しみにしていま

す。みんながすばら
しい劇場だと語るこ
の劇場にデビューで
きるのが幸せです
し、私が指揮する
《ルチア》が、そして
ローレンス・ブラウ
ンリーのエドガルド
役デビューに期待が
寄せられていると聞
いています。ドニ
ゼッティはベツリー
ニや初期のヴェル
ディのように、オー
ケストラが歌の伴奏
に徹することはな
く、独自の存在価値
があるのです。響き
やアクセントや品格への配慮は大切で、
オーケストラ・ピットから生まれる音楽
は、舞台上での歌手たちの動きの生きた
推進力とならなければいけないのです。
ドニゼッティは天才で、細部まで完璧な
音楽を書いていきます。それだからこそ、
下品にならないように気をつけなければ
なりません」



この号の発売してすぐ、新国立劇場で《ランメルモールのルチア》(ルチア)を指揮する

以前語っていたローマ法王の前で指揮
する夢は叶ったのだろうか。

「彼の前のコンサートもまた夢です。
貧しい人々や恵まれない人々、そしてと
くに、悍ましい年にすべてを失った人に
捧げるコンサートなどが実現できたらいい
ですね」

© RIPRODUZIONE RISERVATA



スペランツァ・スカップッチ
1973年生まれ、イタリア・ロー
マ出身。聖チェチーリア音楽院
でピアノを修め、ジュリアード
スクールで伴奏法のマスター取
得。チェンバロやフォルテピアノ
も学び、室内楽、歌曲のピアノ
ニストとしても活躍。練習ピアノ
ニストから研鑽を積んだウィ
ン国立歌劇場で、2016年ロツ
シーニ《チエネレントラ》の指
揮台に立ったときは、3人目の
女性、最初のイタリア人女性と
して話題になる。2017年から
リエージュ・ワロン王立歌劇場
音楽監督。

■公演情報

新国立劇場 ドニゼッティ
《ルチア》
〈日時〉4月18日14時/21日14
時/23日18時30分/25日14
時〈会場〉新国立劇場オペラパ
レス〈指揮〉スペランツァ・ス
カップッチ〈演出〉ジャン＝ル
イ・グリンダ〈出演〉イリーナ・
ルング(ルチア)、ローレンス・
ブラウンリー(エドガルド)、須
藤慎吾(エンリーコ)、伊藤貴之
(ライモンド)、又吉秀樹(アル
トゥーロ)、小林由佳(アリー
サ)、菅野敦(ノルマンノ)、他
〈管弦楽〉東フィル〈問合せ〉新
国立劇場ボックスオフィス03-
5352-9999